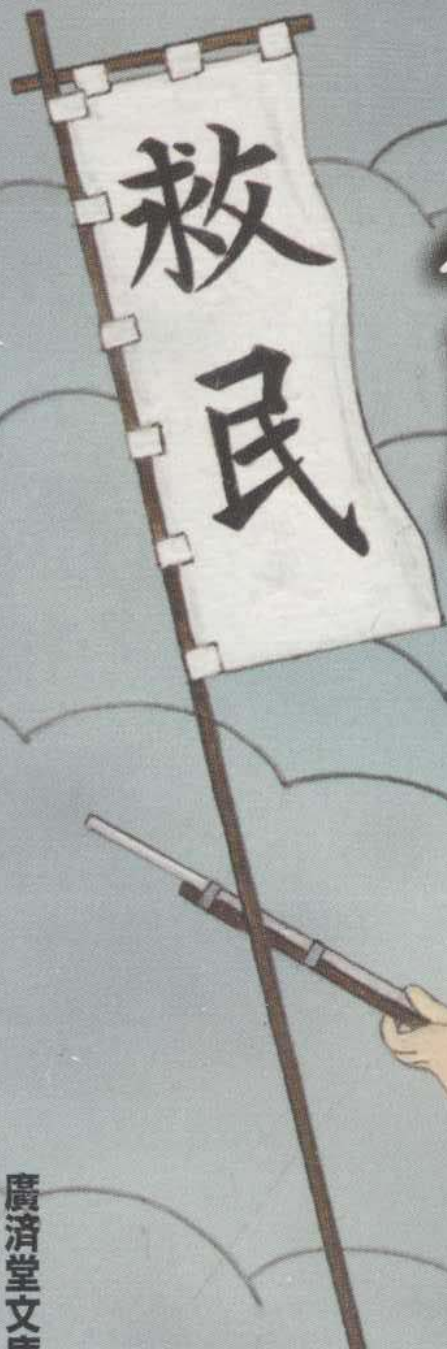


渡辺一雄

大塩平八郎

乱





「乱」大塩平八郎

2002年9月1日 第一版第一刷

著者
渡辺一雄

発行者
中 博

発行所
株式会社廣済堂出版

〒104-0061 東京都中央区銀座3-7-6

電話◆03-3538-7214 [編集部] 03-3538-7212 [販売部] Fax.03-3538-7223 [販売部]

振替00180-0-164137 <http://www.kosaido-pub.co.jp>

デザイン
日下充典

印刷所・製本所
株式会社廣済堂

©2002 Kazuo Watanabe Printed in Japan
ISBN4-331-60960-X C0193

定価はカバーに明記してあります。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。



廣済堂文庫

目次

一、志を立つ	5
二、結婚	27
三、但馬屋宇平	54
四、良知を致す	83
五、知己を得る	108
六、弓削退治	124
七、退隱	145
八、やれうれし	169
九、宇平の推理	189
十、一触即発	208
十一、連判	235
十二、灯は消えず	257

一、志を立つ

大阪・天満の成じょうしやうじ正寺に、

『中斎大塩先生之墓』という

一基の墓がある。

香華が絶えたことがない。

中斎大塩先生とは、世にいう「大塩の乱」をおこした大坂天満与力、大塩平八郎のことである。

名は後素としもと、字は子起。

中斎は号、平八郎は通称である。

香華が絶えないということは今なお多くの人が彼を追慕しているということである。

大阪の人は、格別に大塩の信奉者、研究家でなくてもなにかあると、こんな時に大塩さんが

いてくれたらなあという。

大塩平八郎とは、特に大阪の人にとってどんな存在だったのか、その事蹟をこれから辿^{たづ}ってみたい。

大塩平八郎は、十一代將軍徳川家齊^{いえなり}の治世、寛政五年（一七九三年）、大坂（大阪と呼称が変わるのは明治中期以降でそれまでは大坂といった）天満与力、大塩平八郎敬高の子として生まれた。

幼名・文之助。

両親とも病弱で父を七歳、母を八歳で失い、祖父の政之丞成余、祖母のきよに育てられた。政之丞も与力で定町廻^{じょうまちまわ}りをつとめていた。

定町廻りというのはその名のとおり町廻りをする役で与力のなかでは軽い役目だった。

年いった政之丞がいつまでも定町廻りだったのは彼が上司、先輩に阿諛^{あゆ}追従をしなかったからである。しかしそのことを政之丞はむしろ誇りにしていた。

孫の平八郎を彼は極めて厳しく躰^{しづ}け、祖母のきよにも、

「親がいないからといって甘やかせてはいけない」

いつも口癖のようにいっていた。

躰けに厳しい政之丞は平八郎を八歳から土佐堀の町人儒者、篠崎応道の塾に通わせた。

よく学び、平八郎を知る人は平八郎を神童と讃^{たた}えた。

政之丞は事あるごとに、

「ご先祖さまの名を汚さないよう天晴^{あっぱ}れなものふになれ！」

といつてきかせた。

——天晴れなものふ——とは具体的にどういうことを指すのかわからず、いつか祖父に質^{ただ}し、

「それはお前が考えることだ」

といわれた。

大事なことだから人にきかず自分で悟れ、それが政之丞の教育方針だった。

文之助は祖父の言葉の意味を、正しいことはあくまで貫く、弱い者の味方になる、ということだとうけとめた。

そしてそれが文之助の生涯変わらない信念となった。

八歳の時こんなことがあった。

塾からの帰り、近所の腕白どもが天満の橋の上で長い棒をふり廻し、いくさごっこをしてい

るのにあった。

「俺もいれろ」

家へ帰り文之助も長い棒を持ってきて遊びに加わった。

遊びに興じていると、

「退け！」

「退け！」

と大声で怒鳴りながら何人もの大人がやってきた。

近くに火災が発生し、火許確認のためにやってきた代官の一行だった。

文之助らに道をあけるよう指示したのはその先触れだった。

子どもたちは蜘蛛の子を散らすように脇に寄り道をあけたが、文之助だけはあわてることもなく悠然としていた。

子供心に頭ごなしに怒鳴られてムツとしたのかもしれない。

「退けといったら退かんか」

文之助は先触れのひとりにヒョイとかかえられ、橋のたもとに連れていかれた。

子供たちのなかでは文之助は最年長だった。そんな自分がまるでごみを捨てるように軽々とかかえられて橋のたもとへ置かれたことは、文之助にとって沽券にかかわることだったので、

文之助は、

「無礼者！」

と先触れの役人をにらみつけた。

文之助を無視して、提灯ちようちんを高々と掲げ、馬に乗った代官は火事場にむかった。

代官一行が通りすぎてから、子供たちは折角の遊びを邪魔された思いでまた橋の上に戻り、棒を振り回していくきごっこを再開した。

火災はたいしたことなかったとみえ、ほどなく代官一行はひきあげてきた。

さきのこともあったので、今度は「退け！」といわれる前に子供たちは道をあけた。

その時、ひとりの子供の棒の先が代官の提灯にあたり、提灯が橋の上に落ちた。

馬上の代官は烈火のごとく怒り、

「そやつを捕えろ！」

と下知した。

子供はみな長い棒を持っていた。

おなじくらの背恰好だったので見分けがつかなかったのだろう、

「さきほどのこわっぱだな」

と文之助をかかえて橋のたもとへ連れていった役人が、むんずとばかり文之助の襟首をつか

んで代官の許へ連れていった。

人違いだったが文之助は、

「俺ではない」

とはいわなかった。

それは文之助にいわせれば、天晴れなものもとのふに悖る卑怯な振る舞いだったからである。

役人の手を、

「なにをする」

と振りほどき、

「俺は天満与力大塩家の者だ、逃げもかくれもしない」

と仁王立ちになって見得を切った。

古参与力だったので大塩政之丞の名を代官は知っていた。

どうしたものかと代官は馬上でしばらく考えこんだ。

普通の町方の子供だったら鞭むちのひとつでもくれてやるつもりだったが、いやしくも与力の家

の者とあればあとあと面倒なことになってはと慮おもんばかり、ここはならぬ堪忍をするにしくはない

と考える、

「捨ておけ」

と部下に命じ、ひきはらった。

何度も中断され興もさめ、日も昏れてきたので、

「帰ろうか」

と子供たちはそれぞれ長い棒をかついで家路についた。

「文之助さん」

文之助に近よってきた子供がいた。

文之助より二、三歳年下と思える子供だった。

「なんだ？」

「お代官さんの提灯を落としたのは文之助さんの棒ではなく、わたしの棒です」
「なんだそんなことをいいにきたのか、誰の棒でもいい、気にすることはない」
「なにかいいたそうにしている子供の口を文之助は、」

「もうすんだことだ、誰にも今のことはいうな」

と封じた。

文之助はすんだことだといったが、それだけではすまなかった。

翌日、代官篠山十兵衛の使者と名乗ってひとりの武士が、

「頼もう」

と文之助の家へやってきた。

一旦は堪忍した代官だったが、時がたつにつれ怒りがどうにもおさまらなくなり、掛け合いのため詰問の使者をさしむけたのである。

応対に出た政之丞が、

「なに用か？」

ときくと、文之助の年頃、背恰好を伝え、これに該当する子供はいるか、ということだった。文之助のことだたと政之丞は思った。

文之助は家の中にいたが、使者の様子が気色ばっていたのですぐにあわせてはいけな
い、

「用をいいつけて外出させている。わたしは祖父だが、代わってきこう」

と政之丞は用むきを質した。

使者の口上を聞き、これは厄介なことになったと政之丞は頭を抱えた。

使者の話がもし事実なら、子供がしたことではすまされない、幕府の権威を冒瀆した科に問
われかねない重大事に発展する恐れがあったからである。

ここはよほど慎重に対処しなければならぬと思い、

「孫が帰ってきたらきき質し、代官にはこちらから返事にあがる」

とひとまず使者をひきとらせた。

そのあとで政之丞は、まず真相を知ることだと考え、

「ちょっときなさい」

と文之助を自分の部屋へ呼んで使者の言葉をそのまま伝え、

「そのようなことがあったのか？」

と問うた。

「ありました」

文之助は悪びれず胸を張って答えた。

「どうしてそんなことをしたのだ」

重ねて問われて文之助は当惑した。

他人のしたことで自分のしたことではなかったからである。

しかし今さらそれは友だちのしたことですともいえず、

「代官の下役がわたしに無礼を働きました。それでその仕返しをしたのです」

「どのような無礼を働いたのだ？」

文之助は代官の下役にかかえられて橋のたもとに連れていかれたことを話した。

「それを無礼とうけとめ仕返しをしたのだな」

「はい」

文之助の思いはわからないでもないが、とんでもないことをしてくれたものだ。と政之丞は途方にくれた。

武士たる者辱しめ^{はずか}をうければその何倍かにして返さねばならないと教えたような気もしたので、政之丞とすれば無下に文之助を叱ることも出来なかった。

さてこの始末をどうつけようかとしばらく思案を巡らしていたが、謝罪にいくしかないという結論に落ちつき、

「代官屋敷にいく」

と文之助に告げた。

「代官屋敷へなにをしにいかれるのです？」

「詫^わびにだ」

「わたしの代わりにおじいさまが詫^わびにいかれるのですか？」

「そうだ」

「わたしのしたことはそんなに悪いことだったのですか？」

納得出来ないことはとことん追及する文之助だった。

「悪い」

政之丞は文之助に説いて聞かせた。

「代官の提灯だけでなく、すべてのご用提灯に無礼を加えることは重罪なのだ」

「おじいさまが詫びにいかれて、それですむのですか？」

文之助は執拗しつようにいきがった。

「それはわからない、お前を引き渡せといわれるかもしれない」

「そうなればわたしはどうなります？」

「最悪の場合は打ち首になる」

脅しではなくその可能性も否定出来なかった。

打ち首になるかもわからないと聞いて文之助はどのような表情をするか、政之丞はじつと文之助をみた。

文之助は顔色ひとつかえず平然としていたので、政之丞は、こやつ年に似ず肚はらのすわった男だと感心した。

「おじいさま、代官屋敷へなどいかないでください」

文之助はとめた。

「どうしてだ、詫びにいかなかったらお前の身柄を引き渡せといいにくるかもしれないぞ」